
ひとしずくの時間

猫に小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとしずくの時間

【Nコード】

N7665H

【作者名】

猫に小判

【あらすじ】

子どもの頃から交流のあった2人。異性同士、思春期ともなればお互いに意識してしまうもの。しかし相手のことをよく知る身としては、どうしても受け入れられないこともある。我が道突き進むマイペースな少年と、常識を捨てきれない少女。彼女が彼に素直に恋心を抱ける日は訪れるのだろうか。

第1話 日常の隙間

（あー、雨降りそう……）

午後4時を過ぎて急速に曇り始めた空を見上げながら、浅宮理香はそんなことを思った。

鞆の中から携帯電話を取り出して時間を確認する。現在午後4時33分。ついでに本日の天気予報を確認すると、午前も午後も降水確率は0%、絶好のお出かけ日和となるでしょう。

（天気予報って……当てにならない……）

どう見ても現在空を覆い始めている雲は雨雲だ。せめて通り雨ですぐ止んでくれるといいなあ……とぼんやり考えていると、不意に肩を突付かれて、理香は後ろを振り返った。

「どうしたの？ ぼんやりして」

座っている状態の理香に合わせてか、しゃがみ込んだ姿勢でそんなことを聞いてきたのは、現在理香がぼんやりとせざるをえない原因を作った人物である。

「……あのさあ、今日って春休み最後の日じゃない？」

「そうだねえ。ここの桜、2本しかないし、おまけにもう葉桜になっちゃってるし、なんか楽しい時間はおしまいって感じで嫌だよね」

「……普通さあ、春休み最後の日っていったら、仲の良い友達とばーっと遊びに行ったり、もしくは課題の追い込みしてたりするよね？」

「追い込まれるような課題を出されたことがないからわからないけど、理香ちゃんの課題は僕が手伝ってとくに終わってるから何の心配もいらないし、今現在理香ちゃんは僕と遊んでるんだから、まあ、そうなんじゃない？」

「いやいや、遊んでねえよ！」

引きつった笑顔で言葉を紡いでいた理香は、いつも通りマイペー

すな返答をする相手の最後の言葉に、とうとうキレた。

「友達と一緒に遊ぶっていうのに、何の前触れもなく朝の8時から人の家に来て有無を言わせず連れ出した拳句電車の乗り換えしまくって隣の県の端っこの明らかにド田舎だろ！　ってここに連行して更に絶対地元じゃ心霊スポットとかに指定されてそんな山奥のめちやくちや石段多くて上っただけで明日筋肉痛になるのが確實そうな上昼間でもなんか暗い上にぼろぼろでお化けできそうな廃れた神社についてすぐ『じゃあちよつと探し物があるから理香ちゃんは適当にしててね』とかほざいて一人で消えて一緒に来た相手を4時間近くも放っておくことは入らないよ！！　せめて昼飯くらい置いてつてよ！！　お腹すくわお化け出そうで怖いわすることなくて暇だわ、ぼんやりしたくもなるわ！！」

腰掛けていた石段の頂上から立ち上がり、相手の胸倉を掴みあげてぐらぐら揺すりながら一息で言い切ると、理香はぜえぜえ息切れしながらしゃがみ込んだ。

無駄に疲れた。叫ぶのも自分よりガタイのいい相手を掴みあげるのも、理香の残り少ない体力ゲージをガンガン削った。しかしまだまだ言い足りない。

そもそも理香はただ単にぼんやりしていたのではなく、正確には空腹やら疲労やら理香を放っていなくなってから全然戻ってこない相手への怒りやらで、脳みそがうまく活動しなくて若干現実逃避気味にぼんやりしていたのだ。

それなのに叫ばれて胸倉を掴まれた相手は、

「ああ、そうだった、理香ちゃんはお昼ご飯抜いたらしんどいんだっけ。忘れてたよ」

「ごめん、ごめんと全く悪びれない様子で笑いながら軽い調子で謝ってきた。」

(……石段から突き落としてえ……)

思わず真剣に思ってしまった。理香は慌てていかんいかん、と首を振る。空腹と疲労のせいでいつもより思考が暴力的になっている。こいつ相手に冷静さを欠いたら後々酷いことになる、ということ。理香は既にこれまでの経験で十分に学んでいる。ちらりと石段を見下ろして、この高さ(理香は上りの道中、石段の数が100段を超えた辺りで数える努力を放棄した)と石段の形(石段自体が古いのか一段一段が非常に高めの荒削りの石段で、でこぼこしている。多分頭とかを打てば非常に痛い)から、うまくいけば相手に致命傷くらいは与えられるかな、いやいつそ殺せるか、などと思いつつも、それは心の中で思うだけにしておいた。人を高い所から突き落とすなんて、そんな最低なことを理香がしてよいはずがないのだ。

「……あ。降ってきたね」

でもやつぱ突き落としたいな……、と考えていた理香を現実引き戻したのは、理香の脳内で4回ほど石段の上から突き落とされた人物だった。言われて理香は空を見上げ、思わず顔をしかめた。先ほど見上げたときよりも黒く濃い雲が空を丸ごと覆っており、ぽつり、ぽつり、とその雲から大粒の雫が零れ落ちてきた。

「仕方ないな。行こうか、理香ちゃん」

眼鏡に落ちてきた雫を上着の右手の袖で拭いていた理香の左腕を掴んで、理香に空腹・疲労・退屈・濡れ鼠未満という4つの屈辱を味あわせた元凶は微笑んだ。

「多分通り雨だから、止むまであそこで雨宿りしよう」

「……明らかにお化けでそうなんですけど」

「大丈夫、大丈夫。心配なのは雨漏りしないかどうかだよ」

「雨宿りの意味ないよ、それ……」

元凶はうんざりした様子の理香をずりずりと、ぼろぼろで古びた神社の本殿の屋根の中へと引きずっていった。さすがに閉め切られ

た本殿の中自体に入るつもりはないらしく、なんとかまだ形を保っている屋根の部分がかかる位置に行く。

「……ねえ、ほんとにすぐ止むの、この雨」

ぽつりぽつりからあつという間にザーザーと音を立てて降り始めた雨を見て、理香が疑わしそうに言うと、元凶は「大丈夫、大丈夫」と返した。

「大体、もう5時近いしさ……。来るのに結構時間がかかったんだから、帰るのも同じくらい時間かかるんでしょ。あんまり遅くなると、親に怒られるんだけど」

「大丈夫だよ。来るのは時間がかかるけど、帰るのは大体あつという間なんだから」

「そういう感覚の違いを言ってるんじゃないかってさあ……」

「大丈夫だよ。ほんとにすぐだから」

僕の探し物も見つかったからね、と意味のわからないことを言う相手に、理香は思わずため息をついた。

「……真船君のいう『大丈夫』は昔からあんまり当てにならないんだよね……」

理香のその言葉に、相手——真船慎也は、静かに微笑んで、「そうかなあ」と言った。

浅宮理香は明日の新学期から、県立高校の二年生になる。家族構成は楽しいシニアライフを送る祖母と会社員の父、同じく会社員の母、そして地元の大学に通う兄の5人家族である。理香は母親に似て背が低く（現在ギリギリ153cm、目標は後3cm伸ばすこと）童顔で、おまけに父似のド近眼。成績はクラスで常に上位に入っている、まあなんとか優等生といえなくもない、しかし普通の平々凡

々な女子高生である。

それに対して、真船慎也は学年だけは理香と同じだが、通っている高校は全国有数の私立の超進学校（ただし男子校）で、おまけに成績は常に学年上位5位以内、容姿もすらつとした長身の整った顔立ちの少年で、更に家は中々の資産家である。

同じ市内に住んでいるだけで、実際に通う学校も自宅も離れているのに、理香と慎也の交流は初めて出会った小学校4年生の夏休みから現在まで、途切れることなくずっと続いている。

——そして、理香が慎也と初めて出会った時から今現在まで、理香は慎也に振り回されっぱなしなのである。

「……それで、真船君、探し物って何だったの？」

理香が空腹と疲労による苛立ちを紛らわすためにいささか冷たい口調で慎也に問うと、慎也はいつも通り静かに微笑んで、

「僕に必要なものだよ」

と、これまたいつも通りに答えになってない答えを返した。

「……意味わかんないんですけど……」

「そう？ まあ、無事見つかったし、理香ちゃんはそんなに気にしなくっていいよ」

「……私、全然関係ないなら連れてこなくてもよかったんじゃない？」

「まあまあ」

「まあまあじゃねえよ」

静かに微笑む慎也を睨みつける。雨はまだ止まなさそうだし、お腹は空いているし、体はだるい。明日から学校が始まるというのに、筋肉痛だったりしたらどうしてくれるんだ。しかし、そんな理香の剣呑な表情を気にした様子もなく、慎也は静かに微笑んでいる。

（そういえば、ここってなんの神様の神社なんだろう）

ふと、ある意味当然の疑問が理香の頭に浮かんだ。理香の視界の先には、叩きつけるような大雨で判然としない視界の中、所々塗りの剥がれた鳥居がひっそりとたたずんでいる。

ただ、なんだかこの場所はただ古くてぼろぼろな神社、というだけではないような気がした。

（神社、なのかな、ここ……。鳥居はあるけど、なんか色々足りてない気がする……）

「そういえば、理香ちゃん。ここに上ってくるまでの石段の数、数えた？」

唐突な慎也の言葉に、理香は「はあ？」と変な声をあげてしまった。

「結構上るのきつそうだったけど。100段くらいあった？」

「100段で数えるのやめたよ……。明日筋肉痛になってたら恨むからね」

恨みがましい目を向けて、暗に100段以上あったと言ってやると、慎也は目を細めて、満足したように笑って、

「そっか。ところで、ここって何だと思う？」

「またも意味不明なことを言い出した。」

「何って……」

「言っておくけど、ここは神社ではないからね。たしかに鳥居はあるけど、あんなものは単にちよつと目立つ目印にすぎないし。それに、僕らが今居るこの場所も、神社の本殿なんかじゃないし」

慎也の言葉が終わった丁度その瞬間、ダン！！という物凄い音が、ザーザーという雨音と2人の声の間に割って入った。音だけではない。それに合わせて大地が一瞬大きく揺れた。

硬くて巨大な「何か」が理香たちの後ろで壁のようなものにぶつかった、そのせいだということがわかって、理香は危うく泣きそうになった。

2人の後ろには、神社の本殿らしき建物の扉があり、その中にいた「何か」が扉を破って外に出ようとしたのだ。慎也のいない4時間近くの間、理香も神社の敷地内をうろろしてみた。そこで、真つ先に何も見なかったと自分で自分に言い聞かせたのがこの本殿の建物で、風雨にさらされぼろぼろになったその外観以上に異質だったのは、閉め切られた扉だった。

扉は――建物の中の位置から考えてかつては扉だったであろう場所とは頑丈そうな鉄板が溶接され上から完全に塞がれており、さらに鉄板には何重にも朱色のインクで何かを書いたお札のようなものがびっしりと貼られていたのだ。そして、この、匂い。雨のせいで最初よりも余計に強く感じられる、錆びた鉄のような臭いと湿った生臭い獣の臭いが、ねっとりとした体に絡みつくように、後ろから漂ってくるのだ。

（だから真船君と出かけるのは嫌なんだよ……）

ダン、ダン、という何かがぶつかる音はだんだん激しく、そして間隔も狭いものとなっていつている。扉が開かなくても、建物が先に崩壊しそうなほど激しく揺れているのを、理香は横目で確認した。（ここが神社じゃないことはわかった、ていうか最初からなんとなくそんな気はしてたけど……）

では、ここは一体『何処』なんだろう。

理香は自分がここまで来た道順も使った電車の駅名も、何ひとつ覚えていないことに気がついて愕然とした。慎也とともに行動するとしばしば起こりうる事態ではあるものの、理香は未だにそれに慣れることができないでいる。怖いものは怖い。何が怖いって、「何が起こっているのか全くわからない」のが怖いのだ。

「ま、真船君……」

理香が泣きそうな声をあげて慎也の上着を握り締めたのは、「何か」がぶつかる音が唐突に止み、刹那大音量の赤ん坊の泣き声が本殿の中から響き、雨音を切り裂いたためである。

泣き声というより、まるで赤ん坊の断末魔の絶叫である。それが100人分くらい、絶え間なく聞こえてくる。理香は怖くて一度も振り返っていないが、慎也は衝突音が始まってから一分おきくらいに後ろを振り返っては、満足げに微笑んでいた。

「何？ 理香ちゃん」

「もう、いいよ……。ここ、怖い。もう、家に帰ろうよ……」

赤ん坊の絶叫の中、理香の声を聞き取ろうと上体をかがめた慎也の耳元で、ほとんど泣き声で理香は言った。

「でも、まだ雨降ってるよ？」

「濡れてもいいから、帰ろうよ……」

困ったように言う慎也に、完全に涙腺が崩壊した理香は、えぐえぐ言いながら主張した。「もうやだ、帰る」と。

「仕方がないなあ……。じゃ、行こうか」

そう言つと、慎也は左手で理香の右手をとって、雨の中へと走り出した。

雨で滑りそうになりながら、走って、走って、鳥居を抜ける。赤ん坊の叫び声はまるで小さくなることなく辺りに響いている。鳥居を抜けたのに、そのすぐ先にあったはずの石段がなくて、理香は顔を歪めた。本当に、ここは何処なんだ。

「ねえ、理香ちゃん」

眼鏡についた水滴のせいで見え辛くなっている視界の中で、必死に足を動かしている理香の手を引きながら、慎也がどこか楽しそうに言った。

ザーザーという雨音と、空間にビリビリと響き渡る赤ん坊の叫び声の中でも、さして大きくもない普段どおりの慎也の声は、何故だ

か理香の耳にきちんと届いた。

「100段以上ある石段の上から落ちたら、今度は理香ちゃん、死んじゃうのかな」

慎也が掴んでいた理香の右手を離し、突然立ち止まった。リーチの差と運動能力の差から慎也に引つ張られる形となっていた理香は、物理法則に則ってそのまま前のめりになって――宙に放り出された。

驚いて振り返ろうとするのに、不自然な浮遊感と風を切る感覚がそれを許さず、目はつい先ほど4回くらい脳内で慎也が叩きつけられた荒い削り目の石段を捉えて動かない。ただ、雨音と赤ん坊の絶叫の中で、「まあ、無理だろうけどねえ」という慎也の笑い混じりの声だけが、理香の耳に届いた。そして、理香の視界には荒い削り目の石段がいつぱいに広がって――

「じゃあ、今日は付き合ってくれてありがとう。またね、理香ちゃん」

気がついたとき、理香は自分に向かって軽く手をふり、そして明るい夕日の方向に去って行った慎也を見送っていた。

呆然としたまま、顔を横に向ける。見慣れた自分の家が視界に入り、慎也がいつものように自分を送り届けてくれたことを理解する。一拍遅れて、体の感覚がざっと戻ってきた。服はどこも濡れておら

ず、眼鏡も壊れていない。いつの間にか手に提げていた鞆を漁って携帯電話を手に取り、開く。現在午後4時33分。ついでに本日の天気予報を確認すると、午前も午後も降水確率は0%、絶好のお出かけ日和となるでしょう。

「また……が、あるのか……」

慎也と共に行動していると、こういうことがよく起こる。いつの間にか全然知らない場所にいたり、正体のわからない「何か」がいたり。そしてその内10回に1回くらいは、理香が本気で「死ぬ！」というか殺される！！」と思う羽目になる状態が訪れる。それも大体が「何か」ではなく慎也に殺されそうになっているのだから、理香としては遣り切れない。経験上、いつかまた同じことが起こるとわかっていても、理香にはそれを避ける術がないのだ。

そもそも慎也と初めて出会った小学校4年生の夏休みも、理香は初対面の慎也に病院の非常階段のてっぺんから突き落とされたのだ。互いに言葉を交わしたわけでもない、ただ単に本当に出会った瞬間に、である。そこに悪意などが読み取れば理香としてもどうにか対応できるのだが、慎也は当たり前のように、呼吸をするように、理香からしてみれば相当残酷なことをしてくる。むしろ最近ではそこに慎也の優しさや好意のようなものを見つけてしまい、理香としては非常に対応に困っているのだ。

一緒にいるとしばしば理香にとって怖かったり辛かったりするところがあつたとしても、慎也に勉強を教えてもらったり、普通に買い物や食事を一緒にするのは楽しい。何しろ7年間も交流があるのだ。慎也の性格も大体把握しているから、今更理香が慎也と距離を置けば彼が確実に傷つくであろうことは理香にもわかつている。

しかし。

「真性の……サディストなのかな……。先週も、先々週もなんか殺されかけた気が……。でもなんか、真船君嬉しそうだし……。どうしよう……」

先ほど理香に手を振った慎也の顔は、とても優しく、そして嬉しそうな笑顔だった。そして、またねと言った声には隠れようのない好意が滲んでいたし、視線も柔らかな熱をもっていた。

実際のところ、慎也はさらさらとした漆黒の髪と髪と同色の涼しげな瞳、そして病的ではないほど白く、男にしてはもったいないほどきめ細かな肌をしており、体つきも見た目ほど細いだけではなく——理香の好みのストライクゾーンど真ん中で、外見的に嫌がる要素は全くない。

ただ、彼の体質というか性質というか、とにかく何か不可思議なものを理香にも無理矢理一緒に経験させることだけをやめてくれれば、理香は素直に慎也に対して恋愛感情を持てそうな気がしている。

「……まあ、なるようになるか……」

とりあえず、理香は慎也のことをあれこれ考えるのはやめにした。あれはほとんど天災のようなものだ、なんの特殊能力も持っていない平凡な一般人である理香にどうこうできる存在ではあるまい。2人の関係に変化が訪れるとしたら、それは確実に慎也の行動がきっかけとなるはずだ。

そう自分を納得させ、理香は明日からの新学期に備えるために、自宅の玄関を開けた。「ただいまー」という理香の声に、「おかえりー」という祖母の元気な声が返ってくる。

日常は問題なく進み、かくて世界は回り続ける。

非日常とは日常の中のほんの小さな隙間に落ちた一粒の雫のよう

なもので、あつたらあつたで困るが、それも馴染めばいつかは隙間をふさぎ、日常の一部となるのだろう。

少なくとも浅宮理香は、真船慎也と過ごす非日常がそうなることを、心の奥でひっそりと望んでいるのだ。

第1話 日常の隙間（後書き）

だらだらと長い作品を読んいただき、ありがとうございます。
ラブコメ目指してがんばります。

第2話 色づく時間

頭の良い人間には三種類いる、と浅宮理香は考えている。

単純に知識があり成績が良いだけの人間と、その知識を自ら発展させ未知の発見をする人間と、これらの人々から要領よく必要な情報を抜き取っていく人間の三種類である。

「この考え方からいくとあゆみんは三タイプのどれにも当てはまらないよね。ただで英語の予習写させてもらえらると思っただか、この間抜けめ！」

「理香ちゃん酷いよ?! あ、鞆を漁らないでー! それ私の部活前の栄養補給源のポッキー!!!」

ぼかぼかと春の日差しが暖かい昼休みの教室。

去年に続き同じクラスになった友人の佐々木歩美に「次の英語の授業の予習を見せて!」とお願いされた理香は、ちよつと歩美を弄くりつつも英語のノートを貸してあげた。

佐々木歩美は少し癖のある髪をいつもポニーテールにした、クラスで唯一理香と同じ身長少女である。しかも、童顔という密やかな悩みまで同じ。

まだ高校生なのだから、童顔で子どもっぽく見えるのは普通に考えれば仕方がないのだが、他の大人っぽい女子と比べて、自分たちの容姿に微妙にコンプレックスを持ってしまっている二人は仲が良

い。
「でも、びつくりしたねえ。まさか王子と一緒にのクラスになるなんて」

無事ポッキーの箱を理香から奪還した歩美は、自分の英語のノートを机の上に広げながら理香にこっそり耳打ちした。

王子。はて。

「ああ……。去年、入学早々、形骸化していた園芸委員会を生徒会と教師陣に掛け合って取り潰した拳句、自分で園芸部作って毎日学校の敷地内で野菜をせっせと栽培してる園芸王子の東城君ね」

理香はちらつと歩美の左隣の席を見る。

「……まさか隣の席になるなんて……。あの人なんで理系クラスじゃないの？ 農学部目指してるって噂で聞いてただけど。それに私、前に東城君が化学と生物と家庭科の先生相手に、有機栽培の長所と短所について激論交わしてるの見たことあるよ」

「なんか、聞いた話じゃうつかり丸つけるの間違えて文系にしちゃったらしいよ。先生も、東城君なら三年から理転しても問題ないから本人確認しなかったとかなんとか。席はもう仕方ないね、他の子の視線が痛いのは今月いっぱいだよ。うちのクラス、何故か『あ』行と『か』行が多いから、『ササキ』と『トウジョウ』がくつついちやっただね」

やっぱそうなるか……。と脱力する歩美の頭をよしよし、と撫でてやる。

園芸王子（ではなくその実体は農作王子、というのが良識ある教師陣と冷静な生徒の見解）こと東城悠は、何もその普通科高校に通う高校生にしては常軌を逸したかのような農作物への愛情だけで有名なのではない。

本人は純正日本人だと新学期の自己紹介の時に言い張っていたが、濃い茶色の髪に茶色の瞳、肌の色素は薄く、顔立ちには西欧系の非常に整った、それでいて優しげな顔立ちで、スタイルも同年代の男子生徒らの中ではずば抜けている。外見的に、正統派の「王子」系なのだ。

おまけに学校創立以来の秀才で、運動神経も抜群、性格も（農作物が関わらなければ）爽やかで人当たりも良い。園芸委員会の一件以来、校長と生徒会長とは仲が悪いらしいが、性別・学年の上下に

関係なく理香や歩美の通う高校で最も人気のある生徒である。

したがって、隣の席で、授業によつては彼とペアになる歩美はかなりの数の女生徒から羨望と嫉妬の視線を受けているのだ。

「過激な王子ファンがいないからいいけどさ……。ねえ、理香ちゃん」

憂鬱そうな溜息をつきながらノートを写していた歩美が顔を上げて、ニヤッと笑う。

「理香ちゃんのノートに、理香ちゃん以外のキレイな字があるんだけど、理香ちゃんの家って家庭教師雇ってたっけ？」

(……なんで普通に誤魔化せなかったんだろう……)

先日の歩美との会話を思い出して、理香は小さく溜息をついた。

今日は土曜日、理香はいつも通り朝から慎也に拉致されて、色々と連れ回された挙句、現在、先月オープンしたばかりのカフェに来ていた。

店内はカントリー風の温かい雰囲気、カップルだけでなく友達同士や親子連れの客も多い。

理香は注文してからずっと下を向いて携帯電話をいじくっている慎也の様子をそっと見つめる。

初めて慎也に会ってから今まで、理香は家族にも友達にも、慎也のことを話したことがない。両親は仕事で家を空けることが多く、休日は大体昼まで寝ているし、祖母も活動的に出かけるため、理香の家族は慎也に遭遇したことが一度もないのだ。そして、理香は友達にも慎也の存在を隠してきた。慎也のことを誰かに話すのは、な

んとなく憚られたのだ。

しかし、先日の歩美とのやり取りで、歩美に何かを感じられた。あの英語の予習は、確かに慎也に教えてもらいながらやった。その時ノートに色々和无意味な落書きもされたように思う。全部消しゴムと修正ペンでなかったことにしたはずなのに、一部残っていたらしい。

（真船君と私は、一体何なんだろう）

視線を慎也から自分の足元に落として、ふと、そんなことを思う。多分、友達。理香以外は誰も知らない、秘密の友達。

ただ、最近になって、二人の間の空気が微妙に変化してきた。慎也が少し、変わってきたのだ。

理香はその変化に、漠然とした期待と不安をもっている。歩美に何かを感じづかれたのは、良かったのかもしれない。自分でもどうしたらいいのかわからないこの事態を、第三者に客観的に判断してもらえれば、理香がもやもやと悩むことはなくなるのかもしれない。

「理香ちゃん、食べないの？」

慎也の不思議そうな声に、理香ははっとして視線を前に向けた。いつの間にか、理香の前には注文したフルーツタルトと紅茶が置かれている。理香の向かいに座る慎也は、コーヒーを飲んでいる。

「いや、食べるけど……」

「店員さん、理香ちゃんに声かけても反応ないから、ちょっと困ってたよ」

おかしそうに言う慎也に、むっとする。だったら慎也が声をかければいいのだ。理香は少し苛つきつつ、フォークを手に取った。

「新しいクラスはどう？ 楽しい？」

静かに微笑んで問いかけてきた慎也に、理香はタルトを切り分けてつつ答えた。

「うん、まあまあ。今回もあゆみんと一緒だし。王子がいるからちよつと外野が騒がしいけど、雰囲気もいいクラスだよ」

「王子？」

きよとん、とした顔で問い返してきた慎也に園芸王子について話してあげると、彼は少し眉を寄せて「変な人だね」と言った。

（真船君が言っちゃうかな、それ……）

理香からすれば慎也の方こそ『変人』だ。または『危険物』、もしくは『歩く天災』。

「でも、東城君はうちの学校でも有名だよ。去年うちの入試受けて、ほとんど満点の主席だったのにそっちの高校に進学したからさ」

普通は入試の点数なんて本人以外知らないのに、理事長とかが説得に行つたせいで他の生徒にばれて、僕らの代じゃ東城君つて有名な人なんだよねえ、そんな変人とは知らなかったけど——と、のんびりと続けた慎也の言葉に、理香は素直に驚いた。慎也の通う高校は競争倍率の高さも凄いが、超進学校らしく入試も超難関なのだ。それをほとんど満点とは。

「東城君、ほんとにすごい人なんだ……」

「うちに来なかった理由については色々と噂されてたけど、理香ちゃんの話から考えると、東城君がうちの学校に来なかったのは、部活動が活発じゃなくて園芸委員会もなかったからだろうね」

だからやっぱり変人だね、同じクラスでかつこいいからってあんまり仲良くしない方がいいよ、理香ちゃん——と、慎也は理香の目をじっと見つめて言った。

（う……）

その、慎也の声と視線に込められた、柔らかな熱に少したじろぐ。今までとは違う、慎也の些細だが大きな変化が理香を困らせる。今までは、慎也の声も視線もこんな熱をもっていなかった。

「返事は？」

「う……、はい」

促されて、理香が慌ててうなずくと、慎也はにっこりと満足げに笑った。その顔を見ていられなくて、理香はとりあえずフルーッタルトと紅茶に意識を集中させようとテーブルの方へ顔を下げた。そして、

(……え?)

思わず固まった。

理香の前に置かれていた、まだ二口しか食べていない、色とりどりの果物がのったタルトの皿と手付かずの紅茶のカップの中に、大量の小さな白い花が溢れんばかりに盛りかえていたのだ。

(え、何これ……。鈴蘭……?)

葉も茎もない、理香の記憶の中の鈴蘭に良く似た小さな花だ。多分、この真っ白な花の下にタルトと紅茶が隠れているのだろうが、よくわからない。

(え、え、え。ま、真船くん……)

困ったときの真船慎也(ただし大抵の場合その原因も真船慎也)という経験則に基づいて理香は顔を上げようとしたが、できなかった。

溢れかえっている白い花々が、ゆっくりと変化し始めたのだ。小さな、丸まった花弁の先から、徐々に真紅が花弁の白を侵食していく。それと共に、むつとするような甘い匂いが漂ってくる。果物を大量に煮詰めてジャムを作るときに香るような、それよりもずっと濃い、甘ったるい匂い。

(う……)

やがて白い花々が真紅の花々に完全に色を変えると、それらは更に変化した。今度は花弁の先からどろりと液状に溶け出し、皿やカップから零れ落ちてテーブルの上に広がっていった。

甘い匂いが更に強くなり、息をするのが辛くなる。血液によく似た、けれど血液よりどろどろとしている真紅の液体は、ゆつくりと理香の方へ流れてくる。まるで意思があるかのように、ゆつくりとテーブルの端に液体がたどり着く。テーブルの形に合わせて液体が一筋の流れを作り、真紅の大きな雫がひとつ、理香の体に零れ落ち――

「理香ちゃん、食べないの？」

慎也の不思議そうな声に、理香ははっとして視線を前に向けた。

コーヒーを飲み終えた慎也が、頬杖をついて理香を見つめている。理香は瞬きを数回繰り返して、それから自分の前に置かれた、まだ二口しか食べていない、フルーツタルトの皿と手付かずの紅茶の力ツプを見つめて、

「食べるよ」

つぶやいて右手でフォークを持ち、タルトに突き刺す。ちらりと慎也を盗み見ると、彼は理香を困惑させる、柔らかな熱を孕んだ瞳で理香を見ていた。

（わかってるよ）

理香は先ほど、テーブルから零れ落ちた真紅の雫を咄嗟に受け止めた左手を、慎也に見えないように無意識に握り締める。

もう、真紅の液体はなく、息苦しいほどの甘い匂いもない。けれど、なんの香りもない白い花が、真紅に色づいて甘く溶け出すのはあつという間だった。

（わかってるから）

慎也が促す変化に、理香はどうにか答えなくてはいけない。明確な言葉はなくても、声で、視線で、そして先ほどのような「不思議」

によつて、慎也は理香に気持ちを伝えているのだから。

（でも、怖いものは怖いってことは……わかつてくれないんだろうなあ……）

理香が慎也の受け入れられない部分と折り合いをつけるにはもう少し時間がかかりそうなのだ。

想いの色は人の数だけ。想いを伝える方法も。

期待と不安が混じる時間が、鮮やかに色づいていくから、恋は楽しく美しい。

第3話 未来の選択肢

「それって幼馴染じゃないの？」

小学生のときからずっと今まで一緒にいるんでしょ、という歩美の言葉に、現在、『不思議』のことを除いた全ての真船慎也に関する情報を吐かされている理香は、首をかしげる。

「でも、一回も同じ学校になったことないし、家も反対方向なんだよ。大体、私も真船君も、どっちの家族にも会ったことないし」

理香の中では、幼馴染、というのは小さい頃からずっと一緒のご近所さんで、家族ぐるみの付き合いをしている間柄、という認識がある。理香と慎也は小学校四年生の頃に出会って以来、ずっと交流を続けているが、そこに他の第三者の存在が介入したことはないのだ。

「はあ？！ 家族に会ったことないの？！ だめだよ理香ちゃん、いい男を確実に捕獲するにはまず外堀をしつかり固めとかないと！」
捕獲ってなんだ。ハンターか。

ハンターというより獲物を狙う腹を空かせた肉食獣のような眼で言う歩美に、理香は引きつった顔で言った。

「いや、真船君の家には行ったことあるんだけどね、親御さんは海外出張多くて顔を合わせたことないんだよ」

「じゃ、チャンスじゃん！ 親がいない隙に捕獲して奪っちゃいなよ！」

何を奪うんだ。

やたらと眼をぎらつかせて鼻息も荒く言い切る歩美に、理香は内心少し引く。普段は大人しくて可愛い容姿の少女がする雌豹のような顔は、割と怖い。

「あー、というかね、あゆみん。ずっと普通に友達だったとして、そういう関係って、変わっちゃうもんなの？」

ぎらつく歩美の目から視線を外しつつ、理香はとりあえず聞きたいことだけ聞いて、さっさとこの小さな肉食獣の前から逃げ出そうと決心した。

「そりゃ、男女で永遠の友情が成立する場合もあると思うけど。でも、やっぱりずっと一緒にいる身近な異性っていうのは最初に意識するもんだと思うよ。幼馴染でなくっても、父親とか兄弟とか、近所に住むお爺さんとか」

「いや、爺さんを意識するのは明らかに系統が違っただろ」

それは孤独死を心配してとか、そういう意味での意識ではないのか。

「恋に年齢は関係ないの！ 問題になるのは実際に手を出したのかどうかだよ！」

「うん、納得はできるけど問題発言だよ、それ」

お願いだからその可愛い声で「見てるだけなら問題ないんだよ、げへへ」といった類のストーカーの主張のようなことを言わないでほしい、と理香は切実に思った。

「でも、理香ちゃんの話を総合するに、普通なら中学生の時点で起きてそうな変化が2人の間に今、訪れてるって感じだよな」

歩美はそう言っ、今度は雌豹から魔女の妖しい笑みへと表情を変えた。

「だって、理香ちゃんたちの関係って、幼馴染ほど近くはないから絶対に身内には分類されないし、友達っていうには閉鎖的だし。ある日突然接点がなくなっちゃって終わっちゃうか、完全にくつついちやうかのどつちかし、未来がないって気がする。」

理香ちゃん、別にそのマフネ君のこと、嫌いじゃないんでしょ？
じゃあ、問題ないじゃない」

付き合っちゃいなよ、と言っ、歩美はにっこりといつも通りの

笑顔を見せた。

そんなことを歩美に言われた日の次の週に始まったゴールデンウイークの二日目に、理香は自宅と反対方向に位置する閑静な高級住宅街の中にある、慎也の家に来ていた。

慎也の家は、ここに普段住んでいるのが慎也と住み込みのお手伝いさん二人だけ、というのが明らかに空間の無駄遣いだと理香に真剣に思わせる、非常に広い上に豪華な4四階建ての建物である。

その建物の四階にある慎也の娯楽室（という名の広くて豪華な応接間である。慎也の部屋は勉強部屋・寝室二部屋・娯楽部屋三部屋に分かれている）の一室で、出されたジュースと持参した土産のケーキを食べつつ、理香は慎也に苦手科目である数学を教えてもらっていた。理香の高校ではゴールデンウイーク明けの次の週から、中間考査が始まるのである。

「理香ちゃんの学校って、運動部の数が多いんだっけ」

理香には理解不能な細かい外国語がびっしりと並んだ本を読みながら、慎也がそんなことを言った。

「うん、そうだよ。結構強い部活も多いから、夏の大会にテスト日程が被らないように、今年から変更になったんだよ」

中々解けない数式と格闘しながら、理香が答えた。帰宅部とか文化部の生徒にはいい迷惑だが、これは長年多くの運動部生と運動部顧問から要求されていたことで、五年がかりで生徒会が教師陣と掛け合って、今年から変更されたのである。

「理香ちゃんの学校って、生徒が積極的に動いてるよねえ。うちの生徒会なんて形だけだよ。みんな勉強ばかりしてるし」

まあ、その分成績さえ良ければ基本自由なんだけどね、と言って慎也は向かい側から理香のノートを覗き込む。

「理香ちゃん、これ、最初の考え方からして違う。というか何でこの問題でこの公式が出てくるの？」

形のいい眉を寄せて、怪訝そうな顔で言われて、理香は「うつ」とつまつた。

「だって、そうなると思ったんだもん」

「そうは考えないよ、普通。理香ちゃん、基本問題はちゃんとできるのに、なんで応用問題になると途端に駄目なのかなあ。国語科目は毎回満点近いから問題文の内容を理解するだけの読解力はあるはずのに」

馬鹿にするでもなく呆れるでもなく、ただただ本当に不思議そうに言われて、理香は凹んだ。いつそ貶された方がましな気がする。

「まあ、大丈夫だよ。これくらいの問題なら、テストに出てもちゃんと解けるように教えてあげられるから」

何かに絶望したような表情で自分を見つめる理香に苦笑して、慎也は理香の隣に座るとシャーペンを握って何やらノートに数式を書き出した。

その慎也の端整な横顔を見つめながら、理香はふと歩美から言われたことを思い出した。

（ある日突然、真船君との接点がなくなつてそれつきりになる……）
自分と慎也の関係の、一つの決着のつけ方として、それは「二人が完全にくつつく」ことよりもずっと、自然なことであるように理香には思えた。

慎也の態度が変化してきた最近になつて、ようやく理香は、客観的に見ると慎也と自分が釣り合いの取れていない存在である、ということに気がついた。

それまで、慎也との交流は、理香にとって第三者が介入するものではなかった。むしろ、歩美に「閉鎖的」だと言われて初めて、そ

のことを理香は自覚したのだ。

理香は慎也という際に起きる『不思議』に怯えることはあっても、何をされても慎也の存在自体に恐怖を感じることはなかった。そして、慎也と理香との関係に、他者の存在は必要とされていなかった。それはつまり、理香にとって慎也が無意識のうちに絶対的な存在になっていた、ということではないだろうか。また、今まで続いてきた慎也と理香の交流は、ひどく異常なものだったのではないか。

「真船君」

思わず、理香は隣に座る慎也の上着の裾を握り締めて、彼の顔を見つめた。慎也はきょとんとした顔で理香の方を見た。

「なんか、おかしいよね、私たち。これから、どうなるのかな」

言葉を吐き出した直後、理香は激しい羞恥と自己嫌悪に襲われた。慎也といることについての漠然とした不安を、意味不明な単語の羅列として、張本人に言ってしまったのだ。これではただの変な女だ、何言ってるんだ私は、と内心でうめく。

そのまま、「ごめんなさい何でもないです今の言葉は忘れてください」と土下座しようとして、理香は慎也の顔を改めて見て、固まった。

慎也は、ほんのりと頬を染めて、うろたえたように視線をさまよわせていた。

（……真船君の照れた顔初めて見た……。い、色っばい……）

十六年ほどの人生の中の「ビックリ場面ベスト1」である、慎也との初対面時に階段から突き落とされた時に勝るとも劣らない驚きに、理香はそんなことを思った。

「……うん、まあ、そうだね。僕も今まで気がついてなかったけど、おかしいよね、うん」

視線をあちこちにさまよわせたまま、慎也はそう言った。そして、握っていたシャーペンを置いて、両手で理香の両頬をそつと挟み込む。

「理香ちゃんがどうしたいのかは、わからないけど。僕は一番自然な状態でいたい……うん、理香ちゃんが言うところの、『おかしい』状態でいたい、かな」

そう言う慎也の、理香の頬に添えられた手は冷たいのに、声と視線は確かな熱を持っていた。

「不自然って？」

「うん、つまりね」

今まで通り、これからもずっと、一緒にいたいってことだよ、と言って、慎也は柔らかに微笑んだ。

理香は慎也のその言葉に、二人を今まで守っていた何かの壁が壊れた音を、聞いた気がした。

変化は常に起こっている。ただ、それに気がつかないだけで。緩やかに変わっていく気持ちには、何をもたらすのだろう。

第4話 暗闇の決意（前書き）

後半部分に、ぬるいカニバリズム表現があります。苦手な方はお避けください。

第4話 暗闇の決意

『お前は、周りを不幸にするよ』

真船慎也は真っ暗な部屋の中で、遠い昔、兄弟の一人に言われた言葉を思い出していた。

『お前は何か善いことで、何が悪いことなのか、判断することができないのだろう。お前のような存在は、自我のある生き物を不幸にするよ』

慎也は自分が寝転がっているキングサイズのベッドの枕元においていた携帯電話を開けて、時間を確認した。現在、午前0時30分。もう日付が変わってしまったことを知り、ため息をついた。

『お前は存在自体が不自然なんだよ。私たちと兄弟なのに、私たちよりも異質だ。だから、お前が自我のある生き物と一緒にいるのは、とても不自然なことなんだ』

兄弟の言葉が正しいことを、慎也はよく理解している。

慎也は正しいことと間違っていることの判断はつくが、善悪の判断はつかない。そのせいで、慎也は何度も慎也の近くにいた生き物たちを不幸にした。だから慎也は、慎也の故郷で他の兄弟と過ごした以外、長い期間にわたって他の生き物と一緒に過ごしたことはない。

慎也は、兄弟の一人が指摘したように、無意識のうちに他の生き物の自我に影響を与えていることがある。慎也が気づかないうちに、慎也の領域の中に相手を取り込んでしまうことがあるのだ。

だから、今から七時間ほど前まで慎也と一緒にいた相手、浅宮理香という小さな可愛らしい生き物に、「なんか、おかしいよね、私たち」と言われたとき、慎也は実に久々にうるたえてしまった。

たしかに、慎也と理香が初めて出会ってから今まで過ごしてきた時間はけっこうな長さになる。

理香は度々慎也の領域の中に取り込まれても、他の自我のある生き物のように発狂して死んでしまったり、壊れて人形のようになってしまうことがない、非常に貴重な生き物だ。慎也のことを怯えず、毎回素直に助けを求めてくる。

理香に初めて会ってから数回、無意識に慎也が理香を取り込んでしまった際、理香が怯えて泣きつつも、決して慎也を拒絶したり、発狂したりしなかったため、「何回くらいなら理香ちゃんは無事でいられるんだろう」という純粋な興味から、慎也は理香を構い続けてきた。時には意識的に理香を領域の中に取り込むこともあった。

ただ、最近慎也は、単に理香と二人でいたいという衝動を抑えきれず、理香を慎也の用事につき合わせたり、無理に領域に取り込んだりしている。

理香の泣いた顔や怯えた顔が無性に見たくなり、理香が心細くなつて慎也の上着を握り締めてくる度嬉しくなる。ほわほわした能天気そうな理香の笑顔も、真っ赤になった怒り顔も、どれも堪らなく可愛らしい、と思う。そして、そんな風に理香のことを考えると、慎也の胸のあたりが奇妙に熱くなるのだ。

慎也のそのような変化が、領域にも表れているのか、この間二人で行ったカフェテリアでは、初めて慎也の領域の一部が、理香に自ら接触しようとした。

そして、今から十時間ほど前に、理香に「おかしいよね」と言わ

れて、初めて慎也は、自分と理香が一緒にいることが日常になりつつあることに気がついた。

本来、理香のような生き物とは全く異なる存在である自分が、共に時間を過ごすのは極めて不自然なことなのだ。それをいつの間にか自分が自然なこととして過ごしていた事実、慎也は少なからぬ衝撃を受け、自分の危険性をすっかり忘れていたことを恥ずかしく思った。

しかし、「これから、どうなるんだろう」という理香の問いに、慎也は自分の望みをそのまま伝えた。自分の存在が理香のような生き物とは相容れないことはわかっているが、「これからも、ずっと理香ちゃんと一緒にいたい」と。

思えば、慎也がそのような願望を持ったのは、彼が作られて自我を持ち、動き出してから今日までの気の遠くなるような長い時間の中で、初めてのことである。

慎也は自分の変化に驚きつつ、それを自然と受け入れた。これが、慎也の兄弟たちがかつて、彼に散々説明していた『恋』というもののかもしれない、と漠然と理解し、この調子なら自分もその内、兄弟たちのように他の生き物と同じような存在になれるかもしれない、と慎也は淡い希望を抱いた。

理香はあの後、真っ赤になって固まって、何やらむにやむにやと言って、それから怒ったように「数学教えて！」と慎也に怒鳴ってきた。そしてその後はいつも通り、慎也が理香の家まで彼女を送っていたのだ。思えば、理香と別れる瞬間がやけにつまらなく感じられるようになったのも、最近のことである。

慎也は体を起こすと、寝室の扉を開けて廊下に出た。長い廊下には一切明かりは点されておらず、庭に面した大きな窓も今夜は曇っ

ているせいか夜空の光を全く差し込ませていない。慎也の寝室と同様に、廊下もまた暗闇である。

その暗闇の中、くぐもった女の呻き声が聞こえてくる方へ、慎也は足を進めた。ぐちゃぐちゃと生肉を咀嚼する音とずるずると血液をすする音が段々大きくなっていく。それに比例して、女の呻き声は小さく、断続的になっている。

やがて、廊下の端、階段の前で慎也は足を止める。20代後半の若い女性が、壁に背を預けて座り込んだまま、何かを呻きながら自分の右腕の肉を食いちぎっている。左腕はもうとうに食い尽くしたのか、ところどころ肉片がこびりついた骨しかない。慎也は女の前に転がっている、原型がわからないほど顔をぐちゃぐちゃにされた死体を見て、ため息をついた。その死体は顔をぐちゃぐちゃにされているだけではなく、大きく引き裂かれて広げられた腹の中に、無理やり食いちぎられたと思しき両手足が内臓に挟まれるように差し込まれている。

慎也は二度、強く両手を打ち鳴らした。大きく空間が震えて、次の瞬間、元通りになった。慎也の前には白目を剥いて泡を吹き、気絶して倒れている50代の女性と、壁に背を預けたままうつろな眼をして、半開きの唇から涎を垂らし続けた状態で座り込んでいる若い女性がいるだけである。

「そろそろ壊れるか、死ぬかな…」

そうなる前に解雇して、また新しい住み込みの手伝いを探さなくてはならない。慎也はそう思いながら、指を鳴らす。2人の女性は正気に戻らないまま、操り人形のようなガクガクとした動作で立ち上がり、自分たちの部屋へと帰っていった。

このことがばれたら、慎也は理香に間違いなく嫌われる気がする。

とにかく、理香と過ごす未来のために、もう少し自分の能力を制御できるようにしなくてはならない。

慎也は決意も新たに、寝室へと戻っていった。

遠い昔、この地へ流れ着いた異形は恋を知り、変わり始めた。

小さく弱い生き物を傷つけぬよう、その存在に近づけるように。

第4話 暗闇の決意（後書き）

余談：真船君は「好きな子を苛めたい」タイプではありません。ただ単に理香の泣き顔が好きなのです。彼に「理香を苛めている」という認識は皆無です。真船君は基本的に、彼の中にある規律に基づいて物事を判断しており、そこに一般的な善悪の判断は介入しないので。面倒くさい奴です。

第5話 熱を持たぬ心

「理香ちゃん、修学旅行のクラス別活動の希望調査、もう出した？」
昼休みの教室で、歩美に言われて、理香は頷いた。

「とっくに出したよー。でも、どうせ皆、自由活動の欄に丸してるからさ、適当に丸つけてさっさと出すがいいよ、あゆみん。提出期限、明日までだよ」

「そっかあ。じゃあ、私の調査票、どこにいったか知らない？」

「知らんわ。なくすなよ、提出物を…」

ぎちぎちにプリントが大量に詰まったファイルを漁りながら、歩美が唸る。本当にどこに仕舞ったかわからないらしい。

「さっさと見つけて提出しなよー」

「誰に提出するんだっけ？学級委員長？」

「そうだよ。女子は中川さんに提出。男子は金子君。あゆみんは好きな方に出せば？あゆみんなら金子君に出しても生ぬるい目で微笑まれるだけだよ」

「酷いよ、理香ちゃん?!」

ぴいぴい言っている歩美を無視して、理香は10月にある修学旅行について考える。行き先は北海道だ。涼しい場所に行くのなら、今のような夏場に行ってくればいいのに。そう思いながら、スカートのポケットに突っ込んでいる携帯電話のストラップを無意識に弄くる。現在、理香の携帯電話には、慎也から先月もらった、小さなお守り袋の形をしたストラップが付いている。可愛い桜色をしたそれは、慎也の学校の修学旅行のお土産だ。

理香の学校とは異なり、慎也の学校の修学旅行はクラスの垣根なく、国内外6コースの中から自分の行きたいコースを生徒が自由に選択する、という形をとっている。そして慎也は何故か、最も選択

者が少ない京都・奈良コースを選択したのだ。

くにくにと指先でお守りを押しつぶしながら、理香はそつと息を吐き出した。理香がすっかり失言してしまい、それに対して慎也がほのかに頬を染めて答えてから、既にふた月近く経つ。現在は既に7月に入り、再来週の頭から始まる期末考查を乗り切れれば夏休みである。その間、慎也と理香の関係は大きくは変化していない。ただ、慎也の態度はあの日から明確に変わった、と理香は思った。

慎也に「不思議」につき合わされるのは相変わらずだが、以前より命の危険を感じる回数はぐっと減った。慎也は頻繁に、理香のことを柔らかくて熱い視線と声で構うようになった。理香の手を掴むのではなく、自分の手と繋ぐようになった。そして、理香の反応をうかがって、優しく笑うようになった。今まで、理香の反応をただ観察していただけだったのに、理香が返した反応に、慎也が更に反応するようになった。

（真船君が、普通の男の子みたいになった……）

あの時。

慎也が「理香と一緒にいたい」と言ったときに、それまで理香の意識の中で無意識に、『世界』と『理香と慎也』とを隔てて、『世界』から2人を守っていた壁が壊れた。いつの間にか、慎也は理香の中で絶対的で特殊な人間になっていた。だから、理香は無意識に他の人間を2人の間に介入させることをしなかった。慎也と理香の閉鎖的な関係は、理香がいつからか望んだものでもあったのだ。

それが、壊れた。

今でも度々生じる「不思議」のことを除けば、慎也は以前よりはつきりと、理香に普通の人間らしい感情を見せるようになった。何

事にも静かに微笑んで受け流し、感情の起伏が一定だった今までの慎也とは、ほとんど別人のようになっていてる。

（私は、どうしたいんだろう）

理香は慎也の態度が徐々に変わり始めた当初、慎也のそうした変化に期待と不安の両方を抱いていた。慎也の理香に対する好意の表現は、若干恐怖を感じることもあったが、嬉しいものだった。理香も慎也のことは嫌いではないから、いつかきつと受け入れられると思っていた。

しかし、慎也の明確な変化をうけて、理香は以前、歩美に言われた言葉に含まれた意味を正しく理解した。理香は必死にファイルを漁っている歩美を横目で見やる。

彼女は、「付き合っちゃいなよ」と理香に言った。それはつまり、いい加減腹をくくれ、ということだ。それまでの閉鎖的な関係のままで、理香と慎也に未来はない、という忠告交じりの言葉だ。

（私も、これから真船君と一緒にいたい）

しかし、他の人間が——それが理香の家族であれ、慎也の家族であれ——介入してきて、彼らにこう言われるのが怖いのだ。

「お前は真船慎也に釣り合っていない」と。

閉鎖的な関係だったからこそ、客観的に理香と慎也を比較する人間は、これまで存在しなかった。歩美とて、慎也と直接会ったことはないのだ。もしも歩美が慎也と会ったら、理香との関係を苦笑して否定するかもしれない。「なんだか似合っていないねえ」と。

どこか浮世離れしていた以前の慎也ならいざ知らず、今の普通の男の子のような慎也は、とても魅力的なのだから。

（でも、これは、なんなのかなあ）

理香が慎也と一緒にいたい、という気持ち。

それは、慎也が理香に示すような柔らかな熱をもったものではない、と理香自身は思う。慎也のあの態度は、自分に恋をしているのだ。自惚れではなく、誰が見てもそう思うだろう。理香はそう冷静に判断した。しかし、理香は慎也をあんな風に求めたいと思ったことはない。

（ああ、困ったなあ）

他の人間に、理香と一緒にいる慎也を見せたくない。あの慎也は理香だけの慎也だ。

この、我慢を知らない幼子がお気に入り玩具を他人に取られまゐとするような、傲慢で醜い執着心と独占欲も、恋というのだろうか。

理香とて今まで、何度か人を好きになったことはある。しかし、そのとき抱いていた気持ちのどれもが、今の慎也に対する理香の気持ちに全く当てはまらない。

（真船君に、会いたい。けど、会いたくない）

ただ、慎也がこれからもずっと理香と一緒にいたいと告げた、あの日。

あの瞬間に理香が感じた、理香の頬をそつと包み込んだ、ひやりと冷たい慎也の手の感触すら、溶けてしまいそうに熱いと理香を錯覚させた、今までで一番強く、慎也の言葉に宿った確かな熱。

それが、忘れられない。

熱く燃え上がるでもなく、心が温かくなるでもない、ただ強い執

着心と独占欲。

2人以外の存在を認めたくない心。

人を臆病にさせるその気持ちは何と呼ぶのか、彼女はまだ、気づけない。

第5話 熱を持たぬ心（後書き）

余談：

真船君は、性格と性質を無視すれば、顔よし頭よしお金持ちの超優良物件です。

ちなみに理香は、真船君からお守りストラップの他に、物凄く大量にお土産をもらいました。でも八橋はもらえませんでした。真船君は、八橋が苦手なようです。おいしいのに。

第6話 難解で単純な結論

「初めまして、真船慎也といいます。理香ちゃん、お借りしますね。夕方には送り届けますので」

慎也は実に礼儀正しくそう言って一礼し、理香の手をとって歩き出した。

思いもかけぬ展開に、慎也に引つ張られた理香が慌てて後ろを振り返ると、突然表れた見知らぬ少年に目の前から妹を連れて行かれた兄が、家の前で呆気にとられた顔をして、理香をなす術もなく見送っていた。

「母さん、あれ、誰?!」

しばしの空白の後、茫然自失状態から立ち直った浅宮雄一は、すぐさま家の中にとって返して、台所で朝食の後片付けをしていた母親に、そう問い詰めた。

「うるさいわねー。あれって誰よ」

「それを俺が聞いているんだって!」

「だから、あんたの言ってる『あれ』っていうのが誰のことだって聞いているのよ。前文に対象の存在しない指示語だけで、何のことを言っているのかわかるわけないでしょうが」

「あれは、あれだよ! 今、ちびすけを連れて行った奴だよ!」

「ちびすけ、じゃなくてちゃんと名前で呼びなさい。そういう風に苛めるから、理香に鼻の穴の中にわさびを詰められるのよ」

「そつちこそ俺の親なら俺を助けるよ！あれは死ぬかと思つたわ！……そうじゃなくて。今、ちびすけをどっかに連れて行つた奴！誰？！」

「ええ？理香、出かけちゃつたの？……それなら、いつも理香と遊んでる友達じゃないの？よく休みの日に朝から出かけてるじゃない」
「友達？！」

そうよ、夏休みなんだから理香だつて友達と出かけてもいいでしょ、何いちいち大声出してるのよ、いい加減妹離れしなさいよあんたは——などという母親の呆れた声をBGMに、雄一の頭の中で、友達、という漢字が浮かび、ぐるぐると飛び回つた。ついで先ほど丁寧な挨拶をした少年の、滅多にいない端正な顔立ちを思い出して、雄一は即座に、そんなわけあるか、と思つた。

雄一が全く見たことのない少年だつたが、そのくせ彼の妹の手をごく自然に取つて歩いていった。高校生にもなつて、兄弟でも親戚でもない赤の他人の異性同士がそんな風に寄り添う関係なんて、一つしか考えられないではないか。

「……………おのれ、ちびすけめ。兄に黙つて、いつの間に」

どうやら母親はあの少年については何も知らないようだ。こんなつたら、帰つてきた妹を徹底的に追求してやる。でもって、場合によつては邪魔してやる。

先日、長年片思いをしていた相手に失恋したばかりの、「恋愛しちゃつて若者」が現在世界で一番憎らしい存在である雄一は静かに、理香にとっては非常に迷惑な決意を固めた。

夕方、午後5時半。

いつものように慎也に振り回されて家に帰ってきた理香は、自室のベッドの上に座り込んで、侵入者を睨みつけていた。

侵入者の名前を浅宮雄一といい、地元の4年制大学に通う、理香の4つ年上の兄である。父親に似て180cm近い長身のこの兄は、理香のことを「ちびすけ」と呼ぶ無礼者で、大人げなくも理香のことを小学生レベルの幼稚な内容でしょっちゅう苛めてくる。この間はあまりにしつこくからかってきたので、翌日の早朝、理香は兄がぐーすかと馬鹿面を晒して寝こけている時分に、鼻の穴に練りわさび（消費期限切れ）を詰め込んで絶叫させてやった。

そんな、理香にとっては天敵とも言える兄は、突然ノックもなしに理香の部屋に侵入してきた挙句、勉強机の椅子に腰掛けて、普段からへらへらしている彼にしては珍しく、難しい表情で腕を組んで理香の方を見ているのである。

今朝、普段なら昼過ぎまで寝こけている癖に、どういうわけか早起きしていた兄が慎也と遭遇した時にはかなり動揺した理香であったものの、その後慎也が「お兄さんは、何だか雰囲気サンシヨウオに似ているねえ」などと意味不明なことを言い出したがために、帰宅する頃には朝の動揺は完全に消え去っていた。その代わりに、理香は今日の大半を、何故か兄とサンシヨウオの類似点について慎也と語り合うことに費やしてしまい、無駄に疲れきっていた。

「お前ら、いつから付き合ってたの？」

5分間ほどの沈黙の後、雄一はそう切り出した。

「……………はあ？」

頭の中で、慎也の語ったサンショウオオの生態と兄の生態を無意識に比較していた理香は、兄の口から発せられた思いもよらぬ言葉に、思わず裏返った声で返事をしてしまった。

「『マフネシンヤ』だっけ？俺の見たことのない奴だよな。母さんも知らないみたいだし」

「ちょ、ちよつと待ってよ！別に真船君とは付き合ってるとか、そういうんじゃないよ！」

「ああ？んなわけないだろ。隠すなよ、ちびすけの癖に」

そうかそうか、あつちは『理香ちゃん』で、ちびすけは『マフネ君』って呼んでるわけね——と、しきりに頷いている雄一をよそに、理香は絶句した。なんだ、付き合ってるって。何故そうなる。

「で？『マフネ君』は同じ学校の奴か？結構前から付き合ってたんだろ？」

「だから、付き合っていないってば！勝手に決め付けない！」

「嘘つけ。あれだけ2人だけの空気作り上げといて、そんなわけあるか」

理香の言葉を即座に否定した雄一は、訝しげに眉を寄せて、脳裏に朝の言葉どおり、夕方になつて理香を家まで送り届けてきた『マフネ君』のと理香の様子を思い浮かべる。慎也は、2階の自室の窓から、家の前で何やら会話している2人の様子を観察していたのだ。さすがに何を話しているのかまではわからなかったが、それでも両目の裸眼視力2.0を誇る雄一には、『マフネ君』の理香に対する、柔らかくて優しく、そしてある種の熱を瞳に宿した表情と、その彼を少々戸惑いつつも真っ直ぐに受け入れようとしている理香が作り出す、何だか微笑ましいようなむず痒いような、他者の割り込

めない空間をしつかりと目撃した。

小さくて子どもっぽくて凶暴で口の悪い妹の、そのような場面を見るのは、兄としては何ともいえず気恥ずかしいものでもあり、少々面白くないものでもあったが、『マフネ君』の焦がれるような眼差しに先日まで片思いをしていた自分が重なり、雄一は当初の決意を若干変更して、2人の関係を陰ながら応援してやることに決めたのだ。

「違うってば！大体、私と真船君じゃ、釣り合わないでしょ！」
「はあ？」

思わず、自分の中で悶々と抱えていた不安をそのまま雄一にぶつけてしまった理香だったが、その言葉に肯定の返事を返してくると思った兄は「何言ってんだ、お前」と呆れたような声で、

「それは見た目のことか？まあ、確かに『マフネ君』はいい顔してるけど、明らかにお前ら両思いだろ。つか、本気でまだ付き合っていないのかよ。さつさとくっつけ。大体、あんだけ甘酸っぱい空気を出しといて、釣り合ってるも釣り合っていないもんだろ。そんな評価を気にしてどうするんだ、お前。わざわざ自分で自分を落ち込ませて、なんかいいことあるのか？即結婚するわけでもないんだから、お互いに好き合ってるかどうかって問題より大事なことなんかないだろうが、アホ」

と言い、理香を再び絶句させた。

そんな妹の様子に、（こいつ、もしかして俺とか親に「釣り合っていない」とか言われるのが嫌で『マフネ君』のことを隠してたのか？本物のアホか、こいつは）と、実に単純に物事の本質を捉える性格の雄一は、理香に可哀相な子を見る視線を送る。

他方、理香は兄の言葉を何度も何度も頭の中で反芻して、（……バカ兄貴に納得させられてしまった……。けど、確かにその通りだ……。そもそも真船君って人の意見をあんまり聞かないし、私が勝手に怯えてただけだし……。うわあ、なんか私って、すごく単純なことを悩んでた……。？）などと思っていた。

「……………で、でも、私、真船君のことは嫌いじゃないけど、好き、だけど、でも」

それって、恋愛感情としての好きじゃないと思う——と、いつになく不安そうな声で小さく告げた理香に、雄一は（アホな上に面倒くさい奴だな……。！）と思いながら、年長者として、そして理香の性格をよく知っている、長年一緒に暮らしてきた兄として、妹に告げた。

「あのなあ。傍から見てたらわかるよ、そんなの。お前、あんまりわかりやすすくないけど、昔っから本当に自分が気に入ってる物は、絶対傷つけたり雑に扱ったりしないだろ。物凄く大事にするだろ。で、他の奴には触らせないようにするだろ。同じだよ、それと。お前は『マフネ君』に絶対に嫌われたくなくて、他の奴らにもあんまり見せたくないし、『マフネ君』を拒絶したくもないんだろ。むしろ欲しいんだろ、『マフネ君』が。恋愛感情ってのはなあ、人それぞれだけど、根っこにや自分を相手に受け入れて欲しいっていうのと、相手のことを丸ごと受け入れたいっていう、両方の気持ちがあるもんなんだよ。それを熱烈に表現する奴もいれば、しない奴もいる。お前の場合は、わかりやすく表現できないだけで、欲求自体はあるんだろうが。大体、恋愛感情なんてのは、結構どろどろしてて、綺麗なものじゃないぞ？汚い感情も相手に対して持つもんだ。お前が『マフネ君』と同じような態度を取れなくても、別に構いやしないんだよ。相手がそれを気にしたら問題だけだな、俺が見た限りじゃ『マフネ君』はそういうタイプの人間じゃないだろ。あり

や、ただ単にお前に自分のことを受け入れて欲しいってタイプだな」

ああ、この間までの俺と同じタイプだな、と若干遠い目をする雄一をよそに、理香は啞然とした顔で目の前の兄を見つめた。普段低レベルな次元で理香にちょっかいをかけてくる兄が、今日はなんだかまともな「お兄ちゃん」として、妹の恋愛相談に乗っているばかりか、理香にとって目から鱗が落ちるような的確なアドバイスをしてくれている。

天変地異の前触れだろうか、明日は雨の代わりに空から電信柱が理香めがけて降り注いでくるかもしれない——などと失礼な感想を抱きつつ、理香はここ最近自分が悩んでいた事案が、結局のところ、「浅宮理香が真船慎也に恋愛感情を抱いている」という結論によつて解決できることを悟り、思わずベッドに突っ伏した。

（私、真船君に恋を、しているんだ……）

自分を昔から振り回し、散々怖い目にあわせてきた少年に、恋。自分のことなのに、一体いつから好きになったのか、全くもってわからない。しかし、嫌なわけではない。例え、彼と共にいれば必ず「不思議」が起こるとしても、理香はもう絶対に慎也の手を離したくない、と思っている自分に気が付いた。

（真船君は、真船君なりのやり方で私に気持ちを伝えてくれている）ならば、理香は自分の恋心を自覚した、そのけじめとして、慎也に自分の気持ちを伝えるべきだろう。それが慎也のこれまでの理香への態度の変化と、「理香ちゃんとずっと一緒にいたい」という言葉への、理香なりの返答になるのだから。

「……………まあ、なんだ。お前はまだちっこいからわからんかもしれ

んが、自分の好きな相手が、自分のことを好きになつてくれるつてのは、結構すごいことなんだぞ、ちびすけ。ちゃんと付き合うんなら、今度『マフネ君』がうちに来るときは、せめて俺には紹介しとけ。母さんたちに隠しておきたいんなら、協力してやつから」

その代わり、もう人が寝てる隙にわさびを鼻の穴に詰め込むような真似はするなよ——と言って、ベッドに突っ伏してしまった理香を置いて、雄一は部屋から出て行った。

扉を閉める間際に聞こえた、小さくて子どもっぽくて凶暴で口の悪い、それでも可愛いくて仕方がない妹の、「お兄ちゃん、ありがとう」という照れくさそうな声に、密かに頬を緩めながら。

かくて、彼女は理解する。

恋とは綺麗なだけではなく、それでも相手を強く求めてしまうものであることを。

そして、その想いを伝えなければ、相手を自分のものにできないことを。

第6話 難解で単純な結論（後書き）

余談：

食べ物、特に刺激物の類を、悪戯や報復に使ってはいけません。

よい子と良識ある大人は、絶対に理香の真似をしないでくださいね。

どうでもいい話ですが、作者は、世に存在する兄はすべてからくシスコンであればいい、と妄想しています。

【追記】すっかり第1話で雄一存在を書き忘れ、理香の家族を「4人家族」にしていたことに今気がつきました。訂正しました。すみません。

第7話 過去と現在

『なあ、兄弟。お前は確かに今は、自我のある生き物にとって脅威となる、恐ろしい存在だ。だがなあ、私は他の兄弟のように、お前が常に危険な存在であるとは思わないのだよ。お前の存在は、ある意味、普遍ではあるのだろう。しかし、不変ではない。どれだけの時間がかかるかはわからないが、いつか、お前も私たちに近づける日が来ると思うのだ』

真船慎也の兄弟の中で、最も彼に説教をする回数が少なかった兄弟は、かつてそんなことを慎也に言い、彼の返事を聞かないまま、長い長い眠りについた。

慎也は、自分がある時、兄弟に何と返事をしようとしたのか、今ではもう思い出せないでいる。

真船慎也は、その日の夕方、浅宮理香の通う県立高校にほど近い場所にある市立公園のベンチで、1人の老人と隣り合って座っていた。

老人は、慎也の友人といえる、数少ない生き物の1人である。慎也が老人に託していた面倒事について、老人に知らせなければならなかったことがあったために、慎也は老人とおよそ6年ぶりに会っていたのだ。

2人の会話は、時間にすれば僅か15分程度の非常に短いものだった。話が終わると、老人はベンチから立ち上がって、慎也に向かって深々と一礼した後、かくしゃくとした足取りで去っていった。

この短い邂逅の後、ちょうどこの公園で理香と会う約束をしていた慎也は、先ほどの老人との会話で言われた言葉を思い出して、自然と口元を綻ばせた。老人は別れ際、慎也に向かってこう言ったのだ。

『何年か会わないうちに、貴方も随分と人間らしくなりましたなあ』

慎也が老人に初めて会ったのは、老人がまだ青年だった頃である。老人は当時、ほぼ瀕死の状態で、自分の所属していた部隊の、他の仲間が塵屑のように積み上げられている死体の山の中に、ひっそりと埋もれていた。ろくに身体が動かない状態で、全身を苛む激痛と仲間の遺体の重みに苦しんでいた老人を助けたのが、慎也だった。その時、慎也は現在の『真船慎也』という存在ではなかったが、何となく、その時たまたま目の留まった老人を気まぐれで助け、慎也と老人の付き合いが始まったのである。ほとんどは手紙や電話での間接的なやり取りで、老人と慎也が直接会ったのは、初めて会った日から今日を含めて、まだたった3回目であった。

慎也は、初めて老人に会ったとき、彼に「お前は敵か」と尋ねられて、静かに微笑んで「否」と答えた。

その後、慎也にとつては様々な雑事を片付けた後、故郷に帰った老人との手紙のやり取りの中で、慎也は彼に、自分のことについて様々な問われ方をした。「御仏の遣いか」「神か」「悪魔か」――
――実に色々な問われ方をした。日本が復興し、世界中の思想・文化が取り入れられていく中で、戦争を体験した世代に生まれたにしては、非常に柔軟にそういった文化を吸収していった老人の問いかけは、慎也にとつても面白いものであった。慎也も聞いたことがない神話の中の怪物の名前を出されたこともあるから、老人はいつそ慎也の正体を掴む為に、敢えて様々な国の文化を調べていたのかもしれない。

しかし、戦争の中で地獄を見たからか、自分を含めた人間の善良な面も醜悪な面も嫌と言うほど知っていた老人は、最初に会ったときから、慎也の異質性を本能的に見抜いており、慎也は彼に【人間】として扱われたことは一度もなかった。

それなのに、彼は今日初めて、慎也のことを「人間らしくなった」と評した。それは慎也にとって、思いがけず嬉しい言葉であった。理香への恋心を自覚してからというもの、彼女に近づけるように日夜努力している慎也にとっては、最高の褒め言葉である。

もっとも、人間がどんなに努力してもヒトから魚や鳥に変わることはできないように、慎也の本質は変えることができないから、彼が完全に彼女と同じ生き物になることはできないが、それでもいいのだ。とりあえず、浅宮理香の命が尽きるまで、彼女にとって自分の存在がなるべく【人間】という生き物に近く、そして害悪でない存在であれば。慎也はひとまず、安堵した。

ついこの間は、初めて浅宮理香の家族と遭遇したことだし、理香と今後も一緒に過ごすには、やはり彼女に最も近い位置にある血縁者にも面識をもっていなければなるまい。

そのような発想も、つい最近思いついたことで、慎也はとりあえず理香の外堀もきちんと埋めておくことに決めた。ついでに、新しい住み込みの家政婦を募集しなければ、とも思う。未成年がひとりきりで豪邸に住んでいると、色々怪しまれるのだ。慎也はとりあえず、次の家政婦は3ヶ月は保たせるように努力しよう、と思った。

慎也の自宅は慎也の生活の拠点となっていることもあり、頻繁に慎也の領域が開きやすいのだ。

慎也がそんなことを考えていると、携帯電話のメールの着信を告げるメロディが流れた。確認すると、慎也の予想通り理香からのメールで、待ち合わせの時間に遅れた謝罪と公園内の何処にいるのか、という内容だった。

時間を見ると、現在午後5時10分。たかが10分遅れた程度で謝るなど、理香らしい。微笑ましく思いながら、慎也は今いる場所を打ち込むと、最後に急がなくていいよ、と書いてメールを送信した。

携帯電話を置いてジーンズのポケットに仕舞込み、慎也は静かに目を閉じる。遠い故郷にいる、慎也の兄弟たちは今、何をしているのだろうか。

慎也の兄弟たちは慎也と全く似ていないが、理香の兄はサンショウオオつばいところを除けば、理香とよく似た気配をしていた。顔も体格も似ていないが、あの2人は間違いなく兄妹だ。

自分以外の他者との交わりによって自らの係累を残すことのできる生き物は、慎也の兄弟たちからすれば羨ましい存在らしく、それについての兄弟の愚痴を、慎也はよく聞かされていた。その時は、兄弟たちが何故そこまで羨ましがるのがよくわからなかったが、今なら慎也も何となく理解できるよう思う。

慎也も、理香が慎也との間に子どもを作れたら、きっと楽しいことになる、と思う。他の兄弟では無理だが、慎也には恐らく、理香との間に子どもを作ることできるだろう。それはなんだか、とても素晴らしいことのように思えた。

理香の気配が近づいてきたのを感じて、慎也は目を開けた。もうすぐ、彼女が慎也の前に姿を現すだろう。そう思うと、自然と顔が綻んでいく。

今日、老人との別れ際に、慎也は初めて、自分が【何】なのか、ということについて、否定以外の答えを返した。褒めてくれたので、そのお礼のつもりだったが、老人は慎也の言葉を聞いて一瞬きよとんとした後、爆笑した。何やら『なるほど、貴方にはぴったりだ』とかなんとか言っていたが、何がそんなに面白かったのか、慎也に

はよくわからなかった。

『僕は神でも悪魔でも超能力者でもないけど、兄弟たちは警戒していたね。僕のことを魔王、とか呼ぶ兄弟もいたけれど』

今、あの兄弟はどうしているだろうか。

慎也が故郷を離れる際、長い眠りについた兄弟を思い出して、慎也はふとそんなことを思った。

慎也は今なら、あのとときの兄弟からの問いかけにこう返す。
「確かに、時間はかかったけど、変わっていくのも悪くないね、兄弟」

呟いて、慎也は軽く手を挙げる。小走りで、理香が慎也の方へと駆け寄ってくる。老人に託していた面倒事が片付いた代わりに、また新たな面倒事が増えたし、自分の能力の制御についてもまだまだ問題がある。しかし、彼女と一緒にいられるなら、そんなものは些事にすぎない、と慎也は思っているのだ。

人間に近づくために変わっていく異形。

彼の決意は固く、想いは熱を孕んでいく。

彼の思い描く、素晴らしい未来にむけて。

第7話 過去と現在（後書き）

余談：

真船君に外堀をせっせと埋められそうな理香。

真船君はまず最初に逃げ道をなくしておくタイプです。理香は正々堂々、立ち向かおうとするタイプです。

第8話 彼女の欲しいもの

真船君に告白しよう。

そう決意はしたものの、いつこうに実行できないまま、兄に諭された日から一週間が過ぎた。理香は内心どうしたもんかと焦りつつ、軍手をはめた両手で雑草を引っこ抜いた。

今日は理香の学校の登校日である。とはいえ、実際は午前中の3時間、適当に割り振られた区域を掃除するだけの登校日なので、参加するのは帰宅部の生徒（強制参加）と風紀委員や美化委員、生徒会役員（自由参加枠という名の強制参加）だけである。そして現在、理香は炎天下の中、汗水垂らしながら中庭で、同級生の女子と2人きりで草むしりをしているわけである。

（なんで中庭を女子2人に割り振るかな担任……蹴り倒してえ……）

暑さのせいで苛つきつつも、草を引っこ抜く。歩美は部活の練習を優先させているため、今日の清掃活動には参加していない。とはいえ、恋愛の話になると途端に飢えた獣のようになる歩美に恐れをなして、理香は一度慎也のことについて相談して以来、なんやかやとはぐらかして、歩美に慎也の話をするのを避けているので、今更——特に「ちょっと告白したいんだけど、どうすればいいのかなあ」などという話題を——歩美に相談するつもりもない。

（うーん、簡単なんだけど、恥ずかしいなあ）

慎也が理香に好意を抱いていることは、理香にもわかっていて。だから、振られることはないように思う。ただ、恥ずかしい。そして、2人の関係が変わってしまうことが、なんとなく恐ろしい。

兄が指摘した通り、理香は慎也が好きで、大切に、自分のものになりたいのだ。ただ、慎也の方にもそのような独占欲があるのだとし

たら。

理香が慎也に逃げられてしまうことはあっても、理香が慎也から逃げることができるとは、断じて思えない。つまるところ、今の関係なら慎也を傷つけて、ついでに自分自身を傷つけてでも、2人の関係を終わらせることはできる。しかし、理香が慎也に告白することで、2人の関係が変わってしまったら、理香は慎也を捕まえて離さないだろうし、慎也も恐らくそうだろう。そう思うと、理香は今一步告白に踏み出せないのだ。

（自意識過剰かなあ……。でも、東城君に近づくなつて言つてたしなあ。お兄ちゃんにも薄着で近寄つたらだめとか言つてたし……。かつこいい芸能人褒めたら寂しそうにしてるし……）

基本的に何事にも執着しなさそうに見えて、慎也は案外束縛が強い。そうだと理香は自分のことを棚に上げて思った。時々理香を何時間も放っておくこともあるくせに、そうでない時は慎也に意識が向いていないと悲しそうにしている。そして、理香が慎也を意識する分、「不思議」も今まで以上の頻度で起こりそうだな、とあまり嬉しくない予感がした。

（あの現象だけは、未だに慣れないけど……怖い嫌だし、死にそうな目に遭うのもめんどけど……）

慎也と一緒に居られるのなら、構わない——などと思い始めている自分に、理香は「恋は盲目」という、古代から連綿と続いてきた普遍の真理を思い出して、1人大きく溜息をついた。

「あー、もう、ほんとやってらんない！」

いい加減暑さのせいでキレたのか、理香と同じく1時間半ほどの間、無言で草をむしっていた同級生が唐突に声をあげた。理香は自分とは反対方向に向かって草むしりをしていた彼女を振り返る。

「なんで、制服で、たった2人の女子に、中庭の草むしりなんてさせるかな！こういうのは日頃から暑さに慣れてる運動部の男どもが

やればいいのに！部活動優先の法則、後で兄貴に文句言ってやる！」

ぷりぷり怒りながらそう言っているのは、理香のクラスの学級委員長を勤めている中川美奈子で、彼女は3年生の兄が生徒会長をしているのである。普段は冷静で落ち着いた雰囲気の彼女も、理不尽なこの清掃活動には頭にきたらしい。

「中川さん、落ち着いて。怒っても余計に体力削り取られるだけだから」

「浅宮さん……何でそんなに落ち着いてるの？暑くない？苛つかない？」

「暑いし苛つくけど、もう時間はあと半分なんだし。先生があとでちゃんとやったか確認するって言っても、さすがに女子2人だから出来るところまでいいって言ってたしさ、あともうちよつとだけ頑張ろう？」

「浅宮さん……」

感動したような目で見つめてくる美奈子に、脳内で既に10回は担任教師の頭を蹴りとばした理香は微笑んだ。

「でも、会長には是非言ってほしいな。何も部活動生は清掃活動免除にしなくてもいいのにな」

「ほんとだよ！うちの学校は別に部活動を強制参加させているわけじゃないんだから、そこまで特権認めなくてもいいのに」

しかめっ面で答える美奈子を見て、ふと思いついた理香は、勇気を出して言ってみた。

「あのさ、中川さん。告白するのって、どんな風に言うべきだと思う？」

「はい？」

唐突すぎる理香の問いかけに、美奈子は目を丸くした。そして、

まじまじと理香を見つめる。

「……………浅宮さん、好きな人いるの？」

「うん」

「まさか、園芸王子？」

「それはないです。東城君は観賞用だよ」

「あー、まあ、そうだよー」

うんうんと納得している美奈子は、そのまま理香の方へやって来て、隣にしゃがみこんだ。

「じゃあ、誰？わたしが知らない人かな？」

「うん、多分。別の高校だし。小さいころからの友達なの」

「へえー。じゃあ、幼馴染ってやつ？いいなあー」

にこにこ美奈子は笑った。理香は内心ほっとした。中川美奈子はやはり、歩美のように恋愛になると目の色が変わるタイプの女子ではないらしい。

「わたしは告白とかしたことないからよくわかんないけど、兄貴は割と多いよ、される側で」

「ああ、会長、かつこいいよね。理知的な感じで」

「あれは違うよ、超ど近眼な厚底眼鏡のサドだよ。顔はいいかもしれないけど、性格が駄目だから」

心底嫌そうな顔をして、美奈子は言った。部活動に入っていない彼女は、よく放課後に生徒会のメンバーに拉致されて生徒会長の仕事の手伝いを強制的にさせられているから、会長のことを嫌っているのかもしれない、と理香は思った。

「兄貴に聞いた話だと、真剣に言ってくる子と、ほんとに軽く冗談みたいなノリで言ってくる子と、バラバラなんだって。告白してくる子って」

そう言って、美奈子は首を小さく傾げて理香を見た。

「でも、兄貴はさ、本気の答えが欲しいくせに、わざと冗談みたいな明るいノリで『好き』って言ってくる子は嫌なんだって言ってた

よ。流して傷ついた顔されるのも、断って泣かれるのも、困るんだってさ。わたしは別にどっちでもいいんじゃないかと思うんだけど、受け取る側の好みだね、そういうのって。でも、自分の気持ちをちゃんと伝えたいのなら、どういう風に言うにしろ、思ってることをそのまま伝えるのが一番大事なんじゃないかなあ」

美奈子の言葉に、理香はしばし、考え込む。理香が思っていることを、そのまま慎也に伝える。はたして、うまく言えるだろうか。いまだによくわからない部分のある、真船慎也とこれから一緒にいたい。大切にしたい、独占したい。「不思議」は怖い、実害がない限りは我慢する。だから――

「…………友達には、友達としての未来があるんだよね」

理香の言葉に、美奈子は「うん？」と返事した。

「でも、それじゃあ私、我慢できないんだよねえ」

問題もある人だ。最近では理香のことを大分気にかけてくれるようになったが、それでもまだまだ真船慎也のマイペースさは崩れていない。告白して、その先に果たして、理香と慎也の2人に世の高校生カップルのような付き合いができるのかは甚だ疑問である。しかし、理香は今、その不確定な未来が欲しくてたまらないのだ。

「浅宮さんって、案外情熱的なんだね……」

少し驚いた様子で美奈子が呟いた。理香は照れたように笑って、ただ単に我侭なだけだよ、と言った。

「正直、どう言えばいいのかわからなかったんだけど、そうだよ、自分の気持ちをそのまま伝える、王道こそ勝利の道だね」

「告白成功させる気満々だね……」

「うん。ありがと、中川さん」

「美奈子でいいよ、わたしも理香って呼ぶから」

浅宮さんってただのロリ&眼鏡っ子属性じゃなかったんだね、と理香にはよくわからないことを言って、美奈子は笑った。

「よしっ。今日、告白してくる！」

「おー、頑張れっ。応援してるよー」

思い立ったが吉、即座に慎也に夕方会う約束を取り付けるメールを送信し、理香は微笑んだ。大丈夫、慎也が好きだという気持ちは誰にも負けない。今日は理香が慎也を驚かせる日なのだ。

そして、彼女は動きだす。

2人の関係を変えるため、欲しいものを手に入れるため。

『友達』では得られない未来を掴むために。

第8話 彼女の欲しいもの（後書き）

余談：

園芸王子のネタ（2話初登場）を引つ張っていますが、彼は普通にハイスペックな上にいい人です。本人は出てきませんが。中川さんは大人っぽい頼れる委員長です。でもちよつと変わった人です。

ちなみに、理香は長年の兄との攻防と真船君のせいで、若干暴力的な上に口の悪い女の子です。でも実際に殴りかかったり暴言吐いたりする相手は兄と真船君だけなので、特に問題はありません。

第9話：ひとしずくの時間

初めて会った日のことを覚えている。

まだ私が小学生のときだった。

夏休みが始まってすぐの日曜日に行った、母方の祖母のお見舞い先の病院。両親が祖母と難しい話をしていて、私は退屈で仕方がなかった。兄は友達とプールに行ったため、一緒に来ていなかったせいで、余計に退屈だった。

だから、祖母の病室から抜け出して、廊下の端にある非常階段の扉を開けた。

8階の階段の踊場だった。私の手の届かない、高い位置に小さな窓があつて、そこから眩しい陽の光が差し込んでいた。私がそのまま階段を下りようとしていたら、彼が上の階からこっちに下りてきたんだ。

思えば、私は彼にその瞬間、一目惚れしてしまっていたのかもしれない。

初めて会った日のことを覚えている。

面倒事を友人に頼んだ日のことだった。

帰りに、非常階段を下りていたら、彼女がいた。8階の階段の踊

場。手すりに両手でつかまって、7階に下りようとしていた。上の階から下りてきた僕を、きょとした顔で見ている。

小さな生き物だと思った。だから、突き飛ばした。小さくて弱そうだったから。そういうものを消さなくてはいけない、それが僕の存在意義のひとつで、本能だった。

でも、突き飛ばした次の瞬間に、僕は何故か彼女を助けていた。無意識に領域を広げて、彼女を取り込んで、柔らかな地面に落としていた。よくよく考えれば、小さくて弱い生き物を淘汰するという僕の存在意義と本能は、僕の故郷で必要だったもので、【ここ】にいる間は全く関係のないものだ。

なのに、何故か僕は彼女を消そうとした。そして、助けた。何故だろう。

ただ、驚いて泣き出した彼女が、昔、僕のことを散々に貶しながら消えていった存在と重なった。

だから彼女に泣かれるのが嫌で、彼女の頬を引っ張ってみた。びっくりして泣き止んだ彼女は、黙って僕のことを見つめた。

小さくて、面白いなあ、と思った。小さいのに、涙が出て、感情がある。死に恐怖し、怯える。

生きていた。彼女は僕と違って、小さいけれど、ちゃんと生きていた。

思えば、僕はその時から、彼女のことを好きだったのかもしれない。

午後5時14分。

自分で指定した待ち合わせの時間に遅れてしまった理香は、焦り

つつ慎也の元へと向かっていた。

慎也は気が長い。理香が遅刻してしまっても全然怒ったり呆れたりしない。現に今回もメールで遅刻の謝罪をして慎也の現在地を確認したところ、「焦らなくてもいいよ」という返事が返ってきた。大幅な遅刻ではないとはいえ、基本的に慎也は時間に対して寛容なのだ。だからこそ時たま、理香を3時間くらい平気で放置することもあるのだが。

理香が告白場所に決めたのは、自分の通う高校の近くにある公園の中の一画だ。この公園は割りと大きな公園で、子どもが遊ぶ区画の他に軽いジョギングコースがあつて、全体的には入り組んだつくりになっている。

しかし、平日の夕方には子どもが遊ぶ区画以外の場所は人気がなく、閑散としている。なので、万が一にも告白シーンを他人に見咎められる心配はない、というわけだ。

慎也の待つ場所へと向かいながら、理香は頭の中で家で練った計画を反芻した。

とりあえず、昼に校内清掃が終わってから、きちんとシャワーを浴びて下着から何から全部着替えて、汗の臭いをなくした。服はいつも慎也と2人でいるときのもものと変わらないが、自分で一番似合うと思うものを着てきたし、髪には慎也が修学旅行のお土産にくれた綺麗な細工の花の髪飾りをつけている。

とにかく、ちゃんと自分の気持ちを伝えよう。

計画といっても、結局のところ、それだけだ。

ただ、恥ずかしいからと言って話を伸ばして脱線したり、「不思議」が起こって告白どころではなくなるような事態を回避できるよ

うに気をつけることが大事なのだ。後者については、理香が気をつけたところでどうにかなる問題ではないが、要は心構えが大事なのだ、と理香は自分に言い聞かせた。

児童用の遊戯区画を抜け、木々や花壇が整備された道を小走りで進む。その奥で、慎也がベンチに座っているのが見えた。

ベンチに座っている慎也は、理香を見て微笑んだ。いつもどおりの、綺麗な笑顔だ。理香はその笑顔に内心ときどきしながら、彼の正面に立った。

「遅れてごめんね、真船君」

「大丈夫、遅れるってほどの時間じゃないよ」

ぽんぽんと自分の右隣のスペースを叩いて「座りなよ」と促す慎也に、いつもより若干きこちない笑顔をむけつつ、理香は彼の隣に座った。慎也は静かに微笑んだまま、理香を見ている。

（くう……。こ、この笑顔に油断したら駄目だ……！）

綺麗な笑顔だが、何を考えているのかはわからない。慎也の笑顔は、いつも理香に内心で何を考えているのかをわからせない。そのくせ、いきなり突拍子もないことを言ったりする。慎也のペースに流されたら、理香の負けだ。

（いや、でも、いきなり告白するのって変かな……。雰囲気？とか？やっぱいる？でも、相手は真船君だし……）

理香がうんうんと内心で悩んでいると、ふいに慎也が理香の頭を優しく撫でた。

どきりとして理香が慎也を見ると、慎也は目を細めて彼女を見つめた。

「髪留め」

「へ？」

「してくれてるんだね。僕があげたやつ。よく似合ってるよ」

「あ、ああ。うん……」

褒められて、理香は照れた。慎也は優しい手つきで理香の頭を撫

でている。

「さっきまで、古い友人に会っていたんだ」

唐突な慎也の言葉に、理香はきよとした。彼が自分の同級生のことを話すことはあったが、慎也が理香の前で「友人」の話をしたことは、これまで一度もなかった。

「真船君の友達？古いつて……どのくらい？」

理香の知らない幼馴染か何かだろうかと、思って聞くと、慎也は笑って首を傾げた。

「うーん。もう、かれこれ70年近いかな」

「はあ？」

「色々と面倒ごとを引き受けてくれる、いい人なんだよ。でも、今回はちよつと悪いことをしたかな」

理香の困惑をよそに、慎也は珍しく、困ったように笑う。なんの話？と目で訴えたら、慎也は肩をすくめて言った。

「家族もどきをね。少しの間、彼に作ってあげてもいいかな、と思ったんだ。家族じゃなくても、ペットみたいなものをね」

「彼つて……その、真船君のお友達に？」

「うん。でも、彼にとっては6年が長い時間だったことを、僕はすっかり忘れていた。そうだよねえ、僕も理香ちゃんとそれぐらいの間、ずっといたんだから。6年で、アレは彼にとって、ずいぶん大切な存在になってしまっていたみたいで。だから、無理矢理お別れがきちゃったから、僕と別れた後で、きっと家に帰って1人で泣くのだろうな、と思うと、彼には悪いことをしたかなあ、と」

「……よくわからないけど。真船君がお友達にあげたペットか何かが、寿命か事故か病気で死んじゃって、それを真船君は後悔してるってこと？お友達を……結果的に、悲しませることになったから」

必死に頭の中で慎也の言葉を整理して、理香なりにまとめた。慎也が、後悔するとは。理香を何食わぬ顔で何時間も放置したり、わざと命の危険にさらしたり、からかったりしまくっているくせに、

そんな感情を見せるとは。理香は驚くと同時に、見知らぬ慎也の友人に嫉妬した。羨ましい。

「……………後悔？」

理香の言葉を、慎也は驚いたように繰り返した。「後悔、後悔ねえ…。これが後悔か…。なるほどね」などとブツブツ言っている慎也は、ふと理香の頭を撫でるのをやめた。離れていった優しい手の感触に、理香は残念そうな顔をする。

「……………理香ちゃんは」

「はい？」

慎也は真剣な顔を理香に向けた。迷うように数秒視線を彷徨わせた後、理香ときちんと視線を合わせる。

「理香ちゃんは、僕と会ったこと、後悔していない？」

「……………はあ？」

言われたことが理解できず、理香は慎也を見つめる。慎也は訝しげに眉を寄せて、首を傾げて言った。

「だってね。今気がついたんだけど、僕と理香ちゃんの出会いって、ちよっとおかしかったよね？普通、初対面の女の子を階段から突き落としたりはしないよね」

気がついたの、今かよ。遅い。遅すぎるよ、真船君。

「というか、その後、怪我はなかったけどびっくりして泣き出した女の子のほっぺたをふにふにひっぱって遊んで、無理矢理名前と連絡先聞き出して、翌日から遊びに誘うのって、ちよっと非常識だよね？」

ちよっとどころじゃなく、超非常識だよ。そして驚きすぎて親にも言えなかったんだよ、当時の私。

「で、ずるずるその関係が続けて……。ちよっと変だよね？」

いえ、とっても変だと思います。というか、私、よく考えたら鬼畜少年に恋してるの…？え、私って、実はマゾヒスト……？

理香は少しだけ気が遠くなりかけた。理香が無自覚マゾなら慎也は無自覚サドだ。相性が最悪なのか最高なのか、よく分からない組み合わせ。

混乱する理香に気づかないまま、慎也は更に理香を驚かせる発言を続けた。

「でも、僕もね。今日あった友人に、昔よりずいぶん人間らしくなつたって言われて、じゃあ、大丈夫かな、と思って」

何が？何が大丈夫なの？

「僕はこれからも理香ちゃんと一緒にいたいし、できれば理香ちゃんに僕の子どもを産んでほしいから」

「……………は？」

理香は硬直した。これからも一緒にいたい、という慎也の言葉に真っ赤になって、続いたその次の言葉を理解するのに、5秒ほどかった。

なんか今、彼は理香に自分の子どもを産んでほしいとか、ぶっ飛んだことを言わなかったか。

「…………駄目？」

しゅん、と悲しそうな目で見つめられて、理香は慌てて首を横に振る。別に、駄目ではない。駄目ではないが。

「…………えっと。真船君、つかぬことをお聞きますが。あの、その、あれだ。…………真船君は、その…………私とですね、結婚、したい、と、思っている、ということ、ですか…………？」

言っていて恥ずかしくなって、段々と声が小さくなった。聞き間違いだったらどうしよう。

理香の質問に、慎也はきょとんとした顔をしたあと、一拍置いて満面の笑みをみせた。

「結婚。そうだね、結婚したいな。他人同士が家族になるには、結婚するのが一番だよ。じゃあ、理香ちゃん、僕と結婚してくれる

？」

「え、え……。えええ?!」

思わず、理香は真っ赤になって大声をあげた。何故に、いきなりプロポーズ。

「ちょ、ちよつと……。ちよつと、落ち着いて、真船君……」

「いや、理香ちゃんこそ落ち着いて。大丈夫?……僕と結婚するのは、嫌?」

あわあわとうろたえる理香の頭をぼんぼんと撫でつつ、慎也は悲しそうな顔をした。理香は慌てて首を横に振って、「嫌じゃない、嫌じゃないけど!」と叫ぶ。

嫌ではないが、物事には順序とか、情緒とかいうものがある。

「じゃあ、結婚してくれる?」

「え、う、あ……。い、今すぐは無理だよ?!」

「うん、それは僕もわかってるよ。さすがに成人までは待つから」苦笑する慎也に、だからそういうことじゃなくて、と思う。理香が言いたいのは、そういうことではない。

「ま、真船君は、その……。私のことが、好き、なんですか……?」

どもりつつ、慎也から思いつき視線を外して理香は問うた。心臓はかつてないほどばくばくしているし、顔は真っ赤だ。理香はこのまま、下手したら心臓発作を起こして死ぬる、と思った。

「うん?そりゃ、好きだよ。僕がこんなに長く一緒にいる人間は理香ちゃんが初めてだし、『人間らしく』なっただのは理香ちゃんとうと一緒にいたいからだし」

「へ……」

「僕は理香ちゃんのことが、【世界】で1番、大好きだよ」

慎也の真摯さと、確かな愛情の宿る言葉に、理香は彼へと視線を戻した。慎也は、いつも通り静かに微笑んでいる。そして、その瞳には、信じられないほどの熱があった。理香にとって、決して不愉

快ではないが、むず痒いような、気恥ずかしいような、それでも嬉しい、彼の熱さ。

「理香ちゃんは、どうなのかな」

彼の静かな問いかけに、理香は僅かに体を震わせた。

慎也とは、小学生の時に会った。初対面のときから、彼に散々振り回され、驚かされてきた。怖い思いもたくさんしたし、泣いたり、慎也をどつきまわしたことも、何回もある。

それでも、理香は慎也と離れようとは思わなかった。慎也と一緒にいると巻き込まれる、「不思議」に、理香は何度か、慎也は本当は人間ではないのかもしれない、なんてことを思った。その度に、そんなことはないだろう、とすぐに否定しつつ。

たとえどんなに人間離れしていようと、真船慎也は真船慎也だ。浅宮理香がいつの間にか好きになった、綺麗で、マイペースで、不思議で、優しい少年。

理香は慎也自身を怖いと思ったことはない。これからきつと、理香は慎也自身のことを怖がらないし、嫌いにもなれない。理香は慎也が何者であれ、好きなのだ。慎也が欲しい。誰にも、この特別な存在を、渡したくない。

「私も、真船君が、世界で1番、大好き。真船君が、欲しい。私のものにしたい」

理香の言葉に、慎也は一瞬、虚をつかれたように大きく目を見開いて、驚愕の表情を見せた。彼のこんなに驚いた顔を見るのは初めてで、思わず理香まで驚いてしまった。

慎也は数秒の沈黙の後、黙って理香を抱き寄せた。体温の低い慎也の体は、真っ赤になっていた理香には心地よかった。少しかがみこんだ慎也の肩口に顔を埋める理香の背にまわされた、彼の腕の力

は決して強いものではなかった。理香も、慎也の背に自分の両腕をそっとまわした。こうして2人で抱きしめあうのは、理香にとっても慎也にとっても、初めてのことだった。

「……理香ちゃん」

静かな声で、慎也は理香の名前を呼んだ。彼の吐息がくすぐったくて、理香は小さく身をよじりながら、「何？」と聞いた。

「僕は理香ちゃんが大事だから、理香ちゃんを『僕のもの』にはしないよ。だから、僕の全部を君にあげる。真船慎也の全てを君にあげる。……だから、ちゃんと僕を、理香ちゃんのものにしてね。君が死ぬまで、僕は君だけのものだから」

理香には、慎也の言っていることの意味が、特に「大事だから自分のものにはしない」という言葉の意味が、理解できなかった。しかし、慎也が今、泣きそうなくらい喜んでいることと、「僕は君だけのもの」という言葉が、彼の真実の誓いであることだけは、きちんと理解した。

だから、理香は慎也を抱きしめる腕に力をこめて、「うん」と答えた。

理香の耳元で慎也が小さく笑う気配がして、理香は気がついたら泣いていた。

慎也と想いが通じ合って嬉しいからなのか、なんなのか。自分でもよく分からないまま、理香は慎也の肩に額を押し付けた。泣いたら眼鏡が汚れるな、とちらっと思ったが、気にしなかった。

（ああ、もしかしたら）

慎也の冷たい体温を感じながら、理香はふと思った。

（真船君は、ずっと寂しかったのかもしれない）

彼はいつも、広い屋敷に1人きりだった。住み込みの手伝いがいるとはいえ、それも慎也とは他人だ。慎也はあまり他人に関心がな

さそうに見えるが、それは単に、人との付き合い方が分からないだけなのかもしれない。

理香は慎也のことを、未だに完全には理解していない。彼が本当は何者なのか、彼と一緒にいるときに起こる「不思議」は一体、なんなのか。そういうことの真実を、理香は何も知らない。

しかし、別に慎也のことを完全に理解できなくてもいい、と理香は思う。慎也が理香のものであるのなら、何も問題はない。理香は慎也のことが大好きで、慎也も理香のことが好きなのだから。彼の全てを知らなくても、その想いを知っているだけで、理香には十分だった。

（私は、真船君を、一生大事にする）

理香はそう決意した。理香が生きている限り、絶対に慎也に寂しい思いはさせない。たとえどんなに怖いことが起きても、理香は慎也の手を振り払うようなことは、決してしない。

（だから、大丈夫）

慎也は、あまり激しい感情を見せない。激怒しない。大笑いもしない。理香の前で、これまで彼が涙を見せたことは、一度もない。今も、理香は泣いているが、慎也は涙を流していなかった。

彼の肩口に顔を埋めている理香には、彼の表情は見えない。しかし、理香には慎也が今、理香と同じように泣いていることがわかった。涙はなくとも、慎也もまた、泣いているのだ。

（大丈夫だよ。真船君。あなたが泣けなくても、怒れなくても。真船君が人間じゃなくても、あなたは一生、私のもの）

2人は日が暮れるまで、そうして互いの存在を確かめ合った。暑い夏の日の夕方。ありふれた、平和な時間が流れる日。

この日、この時間は、2人が生涯忘れることのない、大切な思い

出となった。

それは、長い人生の中では、ほんの一瞬にすぎない時間だった。
2人が初めて会ったとき。2人が初めて一緒にでかけたとき。
理香が初めて「不思議」に遭遇して泣いた日。

慎也が初めて理香に殴られた日。

そんな、2人の人生の中で積み重なっていった、2人で過ごした時間。

世界中で毎日起きる事件の中には入らない、2人の些細な「日常」と「非日常」。

無限の時間の流れの中に小さく零れ落ちていったひとしずくの時間が、2人にとってはかけがえのない、大切なものとなった。

身長が小さくて童顔なのがコンプレックスな浅宮理香には現在、恋人がいる。綺麗な顔をした、頭が良くて家が金持ちでマイペースな性格の、真船慎也という恋人が。

彼といると、理香は時々「不思議」なことに巻き込まれる。

しかし、理香はそれを怖がりはするものの、慎也と共にいる。慣れはしないが、諦めはついた。

慎也は小さい頃から掴みどころのない性格だが、その要領のよさで、今ではすっかり理香の両親にも気に入られている。理香はこの間、彼が両親と一緒に理香と自分との結婚式と新婚旅行の計画をか

なり真剣に練っている現場を目撃して、思わず脱力してその場に崩れ落ちた。2人はまだ高校生だ。気が早いにもほどがある。いつもは妹をからかうばかりの兄は、その時ばかりは無言で妹の頭を撫でて慰めてくれた。

なんだかすっかり慎也のペースに乗せられている気がしないでもないが、理香は笑って諦める。否、許すことにした。理香も慎也と早く結婚したい、とは思っているのだ。

慎也は理香と恋人になって、より「人間らしく」なった。

彼は理香といると、よく笑う。以前よりずっと、幸せそうに、優しく笑う。

その笑顔がたまらなく好きで、理香は慎也が笑ったび、彼を一生大事にしよう、と決意する。

そうして、2人は一緒に積み重ねていくのだ。

2人の、ほんの小さな、そして幸せなひとしずくの時間を、いくつも、いくつも。

2人に別れが訪れる、その瞬間まで。

第9話：ひとしずくの時間（後書き）

拙い話を最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

一応、この2人の話はこれで終わりです。

真船君について不完全な部分は、別の作品の中で明らかに…なるかもしれない…です。

完全に相手のことを理解できなくても、一緒にいたい、という女の子と、相手のことをなるべく理解したい、と（おかしな方向に）努力する男の子の話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7665h/>

ひとしずくの時間

2010年10月8日13時36分発行